

# 公開講演会

入場無料

定員 | 各先着**35名**(要予約)  
※各回とも定員になり次第終了します。お早めにお申込みください。

**事前電話予約**  
開催地別に電話でお申込みください。

**いわき** いわきサテライトスペース  
**郡山** 福島学習センター

**郡山**  
放送大学福島学習センター講義室

令和7年 **2月2日** 日

13:00~14:30(12:30開場)



## 社会と文化を読む



講師 **高田 英和**先生  
放送大学客員教授  
福島大学人間発達文化学類教授

戦後(第二次世界大戦以後)の世界は、アメリカがその覇権を握っていることは、ある意味、周知の事柄になっています。われわれの日本も常にそれに追随していて、今に至っています。たとえば、言語(languages)を例にとってみても、英語(English)を身につけることの重要性に、このことは表れています。講演会では、英語をキーワードにして、アメリカと日本、両国の関係性を見ていくことにします。扱われる題材は、文学や映画などになります

**オープンキャンパスも同時開催**

**要申込 12:30~13:00**  
放送大学内容説明・施設見学など

**いわき**  
いわき市社会福祉センター

令和7年 **2月1日** 土

13:00~14:30(12:30開場)



## ソウルの都市計画と儒学思想



講師 **山田 紀浩**先生  
放送大学客員教授  
東日本国際大学経済経営学部教授

現在の韓国の首都ソウルの原型は1392年の朝鮮王朝樹立の時に、それ以前の高麗王朝の首都であった開城から遷都した場所からです。もともとは約18.6kmの石の城壁で囲まれた所であり、漢陽(のちに漢城)と呼ばれました。その城壁の名残が東大門や南大門です。現在では漢江を中心に江南地区と江北地区に分け1千万人以上の人が住んでいますが、本来は約20kmの城壁に囲まれた儒学思想で作られた区域でした。

**郡山**  
放送大学福島学習センター講義室

令和7年 **2月2日** 日

15:00~16:30(14:45開場)



## 考古学からみた環境変化と人類進化



講師 **會田 容弘**先生  
放送大学客員教授  
郡山女子大学短期大学部教授

21世紀の人類は、持続可能な循環型社会を模索し始めた。人類は1000万年の地球環境の変化の中で進化を遂げてきた。5万年前以降地球上に生き延びたのが我々ホモ・サピエンスである。その進化の過程と生活領域の拡大の中で、様々な環境変化や災害を経験してきた。先史時代の人類史と環境史はようやくわかり始めてきた。その研究成果を紹介したい。

## お申込み・お問い合わせ先

### 放送大学福島学習センター

〒963-8025  
郡山市桑野1丁目22番21号

TEL.024-921-7471

<https://www.sc.ouj.ac.jp/center/fukushima/>

### 放送大学いわきサテライトスペース

〒970-8026  
いわき市平字菱川町1番地の3(いわき市社会福祉センター4階)

TEL.0246-22-7318



**いわき市社会福祉センター**  
いわき市平字菱川町1番地の3



**放送大学福島学習センター**  
郡山市桑野1丁目22番21号

TEL.024-921-7471

※駐車場がありませんので、公共交通機関をお使いください。

Blair. Also examined will be the two periods in which most of the famous superheroes were first created: the Great Depression and World War II era, which gave birth to Superman, Batman, and Wonder Woman, and the sixties, in which Spider-Man, the Fantastic Four, the X-Men, Iron Man, the Hulk, and *Doctor Who* were first created. The 1980s was another critical period in comic book history, as the World War II-era characters were all radically revamped; their serialized stories began anew with a retelling of their "origin stories" set in the "present" of the 1980s, and their heroism was defined either in support of, or in opposition to, Ronald Reagan's America.

Superhero narratives, as they are traditionally understood, involve colorfully garbed heroic icons that demonstrate uncanny strength, intelligence, supernatural powers, and near-infallibility. Their amazing character traits may be a result of their divine or mythical origins, as in the case of Wonder Woman or Thor; alien heritage, as with Superman or "the Doctor" (from *Doctor Who*); or magic, as in the case of Zatanna Zatara, Doctor Strange, and Harry Potter. In contrast, there are other superheroes such as Iron Man and Green Lantern who are unremarkably "human," but are made supremely powerful by access to advanced technology, or, like Batman, Sherlock Holmes and James Bond, through spending years mastering fighting techniques and honing detective skills. Superheroes such as Aquaman, Spider-Man, and Tarzan are humans who mimic amazing abilities demonstrated in the animal kingdom. Finally, there are those superheroes such as Captain America and Asterix the Gaul whose amazing abilities are derived from performance enhancing drugs or magic potions.

なったり、かなり戯画化された日本人像である。日本ではタクシーの運転手も、アサノの召し使いもさっぱり英語を解さない。コミュニティションが成り立たないのである。異国で不安にかられる中、アサノは唯一、アメリカ人のジャコビー一家の目から見て理解の範疇にいる日本人として描かれる。しかし、アサノが悲しそうに説明する「戦争のために日本人は今も理不尽にアメリカ人を憎んでいるのです」という言葉は、まさにアメリカ側の理解していた日本人像を示している。私たち日本人はアメリカを「理不尽に憎んで」いたとは言えない。終戦後の日本人の感情はそれほど単純に説明できるものではなかっただろう。

戦争後、日本人は手のひらを返したようにマッカーサーを歓迎し、あっさり民主主義を受け入れ、アメリカ文化を謳歌した。その変わり身の早さはアメリカ人から見るとどこか納得できず、無意識の不安感が残るのかもしれない。だから、アメリカ人が今も日本人を疑心暗鬼で見ていると同じように、日本人も内心ではアメリカを憎んでいるはずだ、という裏返しの形で理解を試みる。原爆で死んだ娘というエピソードも日本側の憎悪を裏付ける事実として挿入されたものだろう。実際、アサノの「日本人はアメリカ人を憎んでいる」という言葉に対し、外交官の息子は別に驚くでもなく、さもありなんという理解の表情で聞いている。ここにも、アメリカが解釈した日本人を、アメリカ人が扮装して演じてみせるという「代替」意識がうかがえる。

ともあれ、この映画は日本人アサノが言うように「シヤル・ウィー・スタート・アゲイン?（さあもう一度始めましょうか）」という、戦後日米のやり直しの時代を反映した作品とは言えるだろう。なお「パラエティ」誌調べによると、この映画は一九六一年の配給収入ランクで三十五位タイ（二百五十万ドル予測）。同年にアメリカで製作された映画は百四十七作と低迷していたが、上位四分の一に入っていることから中ヒットと言えよう（ちなみに同年の一位は千九百万ドルの「ウエストサイド物語」）。さて、戦後のハリウッド映画の中で非アジア系が演じた日本人のうち、一番滑稽で、かつ意味のない役は、「ティファニーで朝食を」（一九六一年、ブレイク・エドワーズ監督）でミッキー・ルーニー扮する「ユニオシ」であろう。

ユニオシは日本人カメラマンで、主人公ホリー（オードリー・ヘプバーン）のいるアパートの階上に住んでいる。ミッキー・ルーニーはここに、眼鏡・出っ歯・キモノという日本人の「記号」三点セットで登場する。ホリーはアパートの外鍵を忘れるといつも下でユニオシのベルをリンリン鳴らしてドアを開けてもらう。毎度のことですユニオシは怒り狂うが、ホリーがニッコリと笑って写真のモデルになることを約束すれば彼は彼はデレつと許してしまうのだ。だが階下のホリーが乱痴気パーティーになると、ユニオシは堪忍袋の緒が切れ、ついに警察を呼ぶ。あとで再び警察に密告してホリーを逮捕させるのもユニオシである。この洒落たコメディ映画の中で日本人のユニオシ一人だけが孤立したコチコチの真面目人間として描かれ、マンガ的存在である。

ミッキー・ルーニーはMGMの子役スターとして三〇年代に大活躍したが、大人となつてからは役に恵まれなかった。身長百六十センチの「かつての達者な子役」として知られる俳優が、ここで日本人役に起用されているのはある意味で興味深い。欧米では日本人の特性を「先天的幼児性」にあると分析した時代があつたことが思い出される。戦前の駐日大使ジョセフ・グルーは「日本人は子供なのだから、子供として扱わなければならない」と日記に書き、マッカーサー元帥は「日本人十二歳論」

寺沢拓敬『「なんで英語やるの？」の戦後史——《国民教育》としての英語、その伝統の成立過程』研究社，2014年。

そもそもいつから、全員が英語をやるルールになったかご存知でしょうか。ただ、「全員が英語をやる」という言い方は少しあいまいなので、「英語が義務教育で必修教科になっている状態」と定義しておきます。義務教育の中学校で必修教科になったのは次のいつでしょうか。

- (A) 戦前
- (B) 1945～1952（本土占領期）
- (C) 1952～1970年代前半（高度経済成長期）
- (D) 1970年代後半以降

[...]

正解は、(D)の「1970年代後半以降」です。では、具体的に何年頃のことかご存知でしょうか。実は、中学校で英語（正確には「外国語」です）が必修教科になったのは、21世紀に入ってから、2002年のことなのです。(iii-iv)

中学校の外国語が必修教科になったのは、2002年のことである。正確には、1998年に改訂された学習指導要領において、それまでは選択教科であった外国語が、必修教科に「格上げ」され、それが2002年ということになる。[...]

外国語（実態は「英語」）は、2002年のはるか以前から事実上必修科目であり、2002年の指導要領の決定は、「建前」の変更以上の意味はなかった[...]。(2)

戦前から終戦直前まで続いた旧学制は、小学校までが義務教育であり、主として中等教育以降の科目であった外国語（英語）は、「国民」全員が学ぶ状況にはなかった。そして、学制改革（1947年）によって中学校が義務教育になって以降も、外国語は「選択科目」が

相当とされた。[...]

では、選択科目・英語は、どのように事実上の必修科目になっていったのか。(2)

それは、中学校英語の《国民教育》化が、英語教育の必然的な発展によって達成されたわけではない、ということである。英語の意義が向上したから必修化は生まれたわけではないし、「国民」の要求あるいは関係者の「悲願」として必修化されたわけでもない。さらに、新制中学校発足当初の「選択科目」としての理念をきちんと解消して、必修化に移行したわけでもない。必修化の誕生にはむしろ、入試制度の変更や高校進学率の上昇、人口動態、教育言説の意図せざる作用、政治経済構造の変化など、中学校英語にとって外在的な要因の役割が大きかったのである。(246)

「外国語の必要度には多様性がある」との理由から、新制中学校発足時に選択科目が妥当だとされた外国語科は、1950年代・60年代を経て、《国民教育》の正統な構成要素のひとつへと成長していった。この《国民教育》化のなかで重要な働きをした要因は、

- ・ 高校入試への英語の試験の導入、および高校進学率の上昇
- ・ 1960年代前半の生徒数の急激な変動、およびその結果生じた、英語教員の人的余裕
- ・ 戦前から流通していた文化教養説の利用による、非スキル面育成の意義の理論化  
[...]
- ・ 就業構造の変化（若者の離農化）

といったものである。これらの要因はいずれも中学校英語にとって外在的な要因であり、その点で、事実上の必修化は、様々な社会的要因・政治経済的要因による偶然の産物だったことになる。(256)





### ●言語は差別化指標

内田 言葉というのは差別化機能においては、肌の色とほとんど同じなんです。肌の色を見るだけで人種の違いは識別できます。言語はその意味では肌の色と同じくらい効果的な識別指標なんです。言葉は一言話ただけで、その人の出身地域も、出身階層も、学歴も、教養も、社会的地位も暴露し

てしまうからです。

母語だと多少はごまかしも利くかも知れませんが、英語の場合は、「話せる話せない」がカラオケの点数のように一瞬で数値化できる。1分間話せば、「この人のスコアは何点」かわかる。ですから、人間を格づけするときの指標として、英語ほど使い易いものはない。

鳥飼 簡単で、しかもみんなの抵抗がありません。

内田 そうです。

鳥飼 「あの人は上手なんだから、それはもうしょうがない」という感じ。

内田 英語が上手だったら自己努力もしているだろうし、家庭環境もよかったのだろうということで、それだけで高い格づけをされる。

『マイ・フェア・レディ』という映画は、冒頭でヒギンズ教授が登場してきて、ロンドンの街角で、出会う人たち1人1人に一言話させただけでその人の出身地を言い当てるといった特技を披露します。

鳥飼 言語学者ですからね。

内田 「あなたはインドにいましたね」とか、「あなたはオックスフォードでしょ」と次々に当てていって、みんなから嫌がられる。でも、彼はその能力を自慢しているわけじゃないんです。一言口をきいただけで出身階層も学歴もわかってしまうというのは「言語による差別 (verbal distinction)」だと言って怒っているんです。それが「イギリスの病気」なんだ、と。そんなことにならないように、すべての人が「正しい英語」を話すようにすれば、イギリスでも社会的平等が達成されるんじゃないか。ヒギンズ教授はあれで

も社会の平等化を願っているんです。それが花売り娘のイライザに言語教育を施す動機なんです。

ヒギンズ教授は言語が階層差別のツールとして使われている実情を何とかしたいと願っているのに、今日本でなされようとしている英語教育はその逆ですね。明らかに誰も文句が出ないような差別化指標として英語を採用して、これによって日本社会の階層化を効率的に押し進めようとしている。

子供の頃に英語ができなかったら、その段階で「英語ができないから、おまえは社会の下層に位置づけられても文句が言えないのだ」という諦めを刷り込まれる。

鳥飼 「しょうがないや」となります。

内田 そうなんです。英語ができる子供を育てるといって、英語ができない子供の自己評価を下げさせて、低賃金労働者になっても「しょうがない」というマインドを形成するための仕組みなんです。ですから、現場で英語教育に当たっている人たちが「こんなことをしたら、英語嫌いを増やすだけだ」と言うのも当然です。

鳥飼 もう既にそうになっています。小学校で英語が嫌いになる子がもっと増えそうです。

内田 小学校低学年ぐらいから英語嫌いになったら、「自分は英語が苦手だし、嫌いだ」という自己評価を自分に刻みつけてしまう。英語は見たくもない。英語の看板も英語のメニューも見たくない、そんな子供たちが階層下位に位置づけられるわけですけど、「自分は小学校3年から英語嫌いだったから、これは自己責任だ」と自分で納得できるような仕組みを作っている。

### ●英語は低賃金労働者を作るシステム

鳥飼 そうやっていった先に何があるかという、結局、グローバル経営者



が使いやすい人材を作るといことですか。

**内田** 人材には大きく分けると三層ぐらいあると思います。一番上の人たちは、先ほど言われたように、東大ではなくて、ハーバードとか、ケンブリッジとか、オックスフォードとか、スタンフォードに行って学位を取ってくるような人たちです。向こうで学位を取って日本に戻ってきて、「日本語はよくわからないんだけども」みたいな人たちがさまざまな専門職のトップに来る。

第二層は、日本の大学を出たり、英語圏に語学留学した程度の英語力の若者たちで、そこそこ英語ができる。上司の命令を正しく理解できる程度の英語力、でも英語でイノベーションすることはできない程度の英語力を持つ人たちが中間層のサラリーマンを形成する。これが何百万人か頭数が欲しい。それが文科省のいう「グローバル人材」です。

一番下の第三層には、「英語ができないから」ということで自己評価が低くて、当然、学歴も中等教育で終わっているので低賃金労働しか選択肢がないという人が来る。これも何千万人か頭数が欲しい。

グローバリストが欲しがっているのは、中間のグローバル人材層よりもむしろそれになることができなかつた第三層の低学歴労働者だと思ひます。彼らは消費力がありませんが、マーケットとしては全く機能しませんが、その代わり安価な労働力を提供してくれる。日本語しかできないので、日本でしか暮らせない。海外に流出する可能性がない。日本人だから言葉も通じるし、モラルも高いし、社会のルールも守る。政情が不安定な東アジアで操業するよりも、日本で製造した方がほんとうは企業だっていいんです。問題は人件費なんです。日本人労働者を中国人やインドネシア人並みの賃金で使えれば、それが一番いい。今の日本人の時給が中国人程度まで下げられれば、日本に製造拠点を持ってきてても国際競争力は十分に維持できる。どうせ操業するなら、言葉も通じないし、生活習慣も違ふし、統治も不安定な外国でやるより、日本の方がいい。人件費というハードルさえクリアできればいい。

**鳥飼** 助かるわけですね。

**内田** そうです。田中（真紀子）大臣の時代に大学の数を減らすという話をはじめて出ましたね。あれは、その前に国家戦略会議で財界出身の委員から「とにかく大学の数を減らせ、学力のない若者に就学機会を提供するのは無

駄だ」という意見が出たのを承けているのです。教育行政が日本の若者の就学機会を減らすという政策を採択したのは明治維新以来初めてのこのことのはずです。

国民国家の教育行政の目的は本来ただ1つです。それは国民の教育機会をどうやって最大化するか、です。それが近代化過程ではつねに最優先の政策課題だった。でも、それが放棄された。次世代の日本人1人1人の知性的、感性的な成熟よりも、とりあえず企業が儲かるように大量の低賃金労働者を供給できるシステムを作ることを優先させた。教育行政が財界の要請にここまで屈服したのは教育史上はじめてのことだと思ひます。

### ●ネイティブの特権

**内田** 正しい英語を話さなければいけないということは、抑圧的に作用するでしょうね。

**鳥飼** だから、みんな話せなくなります。そして、ネイティブスピーカーと称する教師に何だかんだと言われてね。

**内田** あれは厭ですね。反論できないから。

**鳥飼** そうです。恐縮するわけです。

**内田** 僕はフランス語が専門だったんですけど、フランス人でも人の話の腰を折って、指を横に振りながら、「チッチッチ、発音が違う」とか「フランス人はそういう言い回しはしない」とか言うやつがいるんです。「いや、発音はいいから話を聞けよ」と言いたくなるんだけど、彼らにとって会話のコンテンツは二次的なことなんです。彼らは発音の間違ひや文法上の間違ひを指摘できれば、それだけで知的優位のポジションに立てると思っている。

**鳥飼** 「鹿は何頭いても deer だ。複数でも s をつけちゃいけない」とかね。

**内田** 話の本質とは関係ありませんよ。

**鳥飼** 関係ありません。でも、見ていると、日本人はそういうときに、「アイム・ソーリー」と言って必ず謝ります。「謝る必要はない」と私はいつも思ひますが。

**内田** ネイティブに対しては「いいから黙って聞け」とはなかなか言えないんですよ。コンテンツと全く無関係な、音韻や表現について話の腰を折り、どちらが会話の主導権を持っているのかをアピールする権利はネイティ